

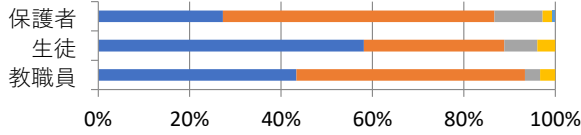
令和4年度 学校評価

■ そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思う
 ■ どちらかといえば、そう思わない
 ■ そう思わない
 ■ わからない

①いのちを大切にする心の教育の充実といじめや不登校への細やかな対応

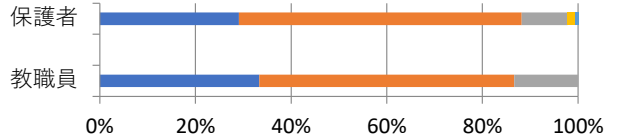
1 一人一人の児童生徒の尊重

学校は、一人一人の子どもを大切にしたい指導や対応ができていますか。



2 道徳・心の教育の充実

学校は、豊かな人間性を育む心の充実に努めていると思いますか。（礼儀、生命尊重、思いやりなど）

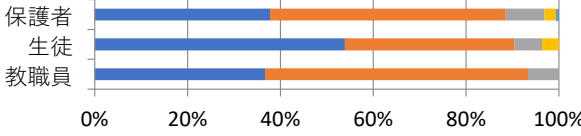


考察：今年度「集会等を活用した人権意識向上のための講話」「きずなアンケート」「面談週間などを活用した児童理解」「道徳の授業参観」「心かやげ月間の『キラキラの木』」に学校全体で取り組んだが、他にも学級で児童が互いのよさを紹介し合う取組や、愛校作業、縦割り班活動・掃除、自慢大会、ボランティア活動、等、主体性が発揮されたり自己有用感が高まったりする取組を行ってきた。「2. 道徳・心の教育の充実」については保護者からもある程度の評価をいただいているが、「1. 一人一人の児童生徒の尊重」に関して児童に「そう思わない」の評価が4%弱あることを真摯に受け止める必要がある。

②確かな学力の向上と社会の変化に対応した教育の推進

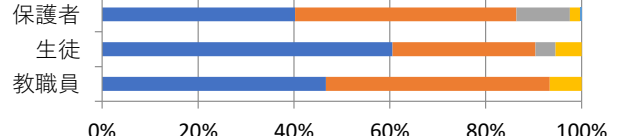
3 授業力向上

先生方は、わかる授業、楽しい授業づくりに努めていると思いますか。



4 タブレット端末活用

子どもは、タブレット端末を活用して学習していると思いますか。

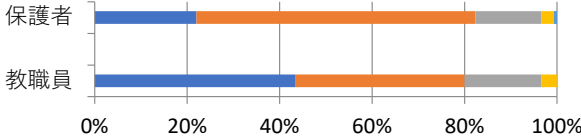


考察：タブレットに関して保護者の評価が教職員や児童の評価より低かった。学校での学習への活用実態が伝わっていなかったり家で遊びに使っている児童がいたりするためと考えられる。今年度の2学期授業参観は道徳であったので、使う機会がなかった学級もあり、児童の技能の向上や学習の効果が伝わっていないところもある。タブレットを活用した授業づくりについては、全職員一人一人の課題を持ち研修に努めるとともに外部講師の講話や助言を得て授業力向上を図っている。「児童自らが学びとる授業」について、参観の機会が少なかったのは残念であった。

③教員が子どもと向き合うための体制の整備

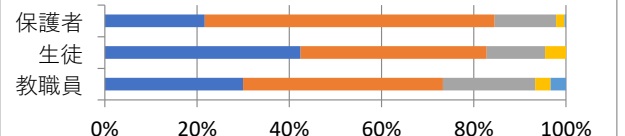
5 学校の支援体制

学校は、支援を必要とする子どもの教育について、共通理解を図りながら取り組んでいると思いますか。



6 共生社会を担う人材の育成

学校が行っている「交流及び共同学習」等は、相互理解につながっていると思いますか。



考察：児童の支援については、「4月の校内研修」「毎月の部会」「毎週の職員連絡会」で共通理解の場を設けている。また、ミニケース会議や学年会等で教職員の対応の方法や工夫できる支援体制等について話し合い、支援に生かせるようにしている。学校は、担任だけでなく多くの教職員で様々な児童に関わりながら、困り感に寄り添った支援を行ったり個性を大切にしたりし、児童全体の伸長を図っているが、「支援が必要な児童への比重が多くそうでない児童への関わりが少ない」と感じておられる保護者からのご意見もあった。

④ 学習に集中できる教育環境づくりと安全対策の推進

7 安全と事故防止	8 家庭や地域との連携協力
学校は、子どもの事故防止などの安全教育に取り組んでいると思いますか。	学校は、家庭や地域と連携・協力しながら教育活動を進めていると思いますか。
<p>考察：学校では、児童の命を守ることを第一に考え、事故防止や安全教育に努めている。学校施設の事故防止のため、月一度の安全点検の時だけでなく、日頃から注意深く複数の目で見えて修繕・補修を行っている。しかし、保護者及び児童の評価が高くないのは、登下校や地域での遊び方などに危険性を感じておられるからだと考えられ、実際に「道路を広がって歩き、車が来てもよけない」というご意見もいただいた。</p>	

来年度の具体的な取組について

- 子ども自身が「学校が楽しい」と言えることが大切であるので、きずなアンケートや教育面談週間を有効活用し、今後も一人一人が安心感を持って学校生活ができ、自己肯定感を高めることができるような教育につなげていく。
- 校内研修の充実によるさらなる授業改善への取り組み。(ICTの活用場面を意識した授業づくりや、積極的な公開授業や授業参観等) 今後も子どもが主体的に取り組む授業を目指し、その成果を校外や地域に発信できるようにする。
- 子どもたちを取り巻く課題が多様化していることもあり、今年度は、学級の垣根を越えて、様々な教職員が様々な子どもに指導・支援を行ってきた。来年度は高学年の教科担任制も本格的に始まるので、更に全教職員で全員の子どものを見ていく体制を確立していく。
- ミニケース会議の継続による児童理解と組織的な対応。また、協議した内容を保護者と共有することで、学校と家庭が同じ方向を向いて児童の支援にあたることができるようにしていく。
- コロナ禍で保護者に伝える機会が減っているが、懇談会や新入学保護者説明会などなるべく機会を捉えて、交流学習や支援について説明を行っていく。
- コロナに関しては、令和5年度をウイズコロナの初年度と捉え、規制緩和を少しずつ行いながら本来の教育活動に戻して行くスタートの年として取り組みを進めていく。
- 交通安全については、学校で指導したことを更に通信等で家庭に知らせたり家庭や地域と連携したりする効果的な方法を模索し、児童の安全確保を行いたい。

学校関係者評価

- 学習だけでなく、今一番大切な「心の教育」に力を入れてあると感じる。教職員が愛情深く児童の成長を見守っていると感じる。
- よりよい日常のための取り組みがよくなされている。「縦割り班活動」や「学期ごとの児童との面談」など、児童の良さを伸ばしたりいじめの芽を摘んだりすることに役立っている。
- 教職員の協働・協力が良い。担任一人を孤立させることなく、全員の教職員で全員の児童を見ていく体制をこれからも続けて欲しい。
- タブレット使用についての賛否があるようだが、今まで無かったことで保護者にも不安があるのだと思う。変な使い方をしている児童だけではないので、「授業の中でこんな使い方をしている」「こんな効果がある」ということを保護者に周知していく必要がある。
- 地域との連携については、地域でも子ども会や自治会への加入が少なくなって、地域離れが課題になっている。個人情報観点から、地域も新入児の名前や家が分からず、登校班等もできないし、旗当番等も難しいのが現状だ。今後、今まで以上に小学校が地域の中心となっていく取り組みが求められるのではないだろうか。